

銀賞

自主保全で守っているもの
マツダ株式会社 本社工場
小野 聖

「意外と設備って止まるなあ」今まで工場を知らなかった私が、この感想を抱くまで時間はそこまでかからなかった。

停止を知らせる警報が鳴り、現場では故障対応を実施するリリースマンが大忙し。頬から汗が滴る夏や、指先が動かしにくい冬でも、この光景は変わらない。経験の浅い私にとって、設備とは機構から部品まで「なんじゃそりゃ？」という不思議の集合体で、どう向き合えば良いか分からなかった。保全なんて専門の人や詳しい人がやってくれる、自分が触ると危ないと思って距離を置く。月に2回程度、自分たちで設備をメンテナンスする日はあるが、砂型を作る私の職場は、大量の飛散した砂を掃除するのに精一杯。チェック項目を消化するのにかかり切りで、項目にある作業の意義を見出さないまま、見た目が綺麗なら大丈夫だろうと完了の印を記入していた。

私は通販で古本をよく買うのだが、ある日ぼろぼろで汚れだらけの商品が届いて非常に落胆した。安いとはいってもこれでは紙くずだなと、仕方なく手入れをしていたら、ふと職場の光景が頭に浮かぶ。現場の人が使うばかりで保全をしていなく、停止を積み重ねる設備への評価は、この手元にある本と同じではないかと。そして、そのような設備にしまっている自分はどうか？私物は補修をするのに、会社の設備は保守ができないことに対する恐怖が私を襲ってきた。やることは一つしかない。不具合を放っておいても誰かがやってくれるという心を洗い、自分の設備と向き合うことだ。

まずは、無知を脱却しようと思い、先輩にいろいろ聞くことにした。嘲笑されそうな初歩的な疑問を投げかけても、真摯に回答をしてくれて、なんなら少し嬉しそうに教えてくれる。「なんだ、もっと早く聞いておけば良かったではないか」と、拍子抜けしてしまった。始めは全く理解が出来なかったが、先輩に連れられて現場・現物で教わったことを確認していくと、それも解消されていた。無駄に気負っていた時間はただの自分の停止時間だった。知識は活動を円滑にし、自信が芽生えた事で、なんとか私でも出来ることはないかと気持ちが前向きに変化していった。

とはいえ、いきなり設備の改善をするのは難しい。ある時、故障対応を実施した先輩に、どうやって復元したのか尋ねると、ポロっと「設備の基本条件は清掃給油増締め」と言われた。それなら自分は基本条件を守ろう。意識していなかったメンテナンスのチェック項目をよく見ると、主にその3つで構成されていることに気が付いた。「よし、メンテナンスを一生懸命にやろう。そして、残りの時間で設備を観察だ。」と。注意深く見ると、点検の項目に無い、コンベアのボルトが緩んでいる事に気付いた私達は、全てのボルトを点検した。そうすると、全17,830個のうち、256個の緩みを確認する事が出来た。すぐに増し締めをし、マップに表すことにした。設備の基本条件が守れなくなる弱点を、ビジュアル化して全員に共有する為だ。また、ボルトの緩む原因と緩みが引き起こす悪さを調べ、ワンポイントレッスンで職場内へ展開し、昔の私のような人が生まれないように知識を伝播していった。その結果、ボルトの脱落を防いだことで安全と品質を守ることに繋がった。

停止はロスを生み、修理に入る人を危険にさらしてしまう。自主保全は、「自分達の設備を自分達で守る先に、職場の価値を守り、仲間を守る為にある」と活動して分かった。まだまだ課題は山積みで、リリーフマンが多忙な様子が見える事もあるが、現状のままで良しとは少しも思わない。自分たちが「基本」を守ることで、一分一秒でも停止時間を短くし、新しく工場に携わる人に「設備って全然止まらないんだな」「設備は親しみやすい」と思ってもらえるような環境を実現するために、保全も出来るオペレーターを目指し、気を引き締めて研鑽を積む。